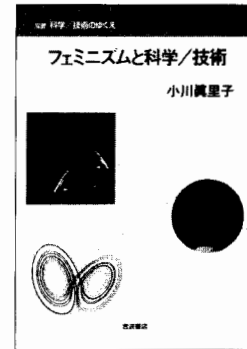


小川眞里子

## 『フェミニズムと科学／技術』

(2001 岩波書店 212 P ISBN4-00-026636-5 C0340 2100円+税)

加藤万里子



ノーベル賞のメダルの裏には、自然の女神のベールをめくる科学者が描かれている。はじめて見た時の記憶では、女神はギリシア風の服をまとい胸をあらわにした姿で、ベールで隠した顔を男性に覗かれようとしていた。めざましい研究成果をあげてノーベル賞をもらうと、このようなメダルももらわねばならないのかと、気が重く感じられるものであった。そのとき漫然と不快に感じた理由が、この本を読んだいま、明解に整理できる。

この本は、男性社会の輝かしい産物と捉えられてきた科学技術にたいし、フェミニズムがどのような視点で切り込んでいるか、これまでの成果を紹介した本である。日本の科学教育では、科学史・科学哲学の視点が希薄で、科学は純粋に客観的なものであり、研究結果には主観がはいる余地はないと教えられている。だから科学者は科学的真理は絶対的なものだと思い込み、科学史を勉強する必要性を感じない。評者の大学でも、理系の学生には、最新の正しい知識だけを教わればよく、歴史上の間違ったことなど知る必要はないという傾向が強くみられる。

そのような読者は、この本の冒頭で、科学の客観性についての幻想を思い知らされる。事實は、あらかじめ準備した論理的な枠組があってこそ、捉えることができるものであり、主観から自由ではない。科学史・科学哲学の紹介を通じて、フェミニズムの視点で科学を見ることが大事であることを示される。もっとも、理系の学生には哲学が苦手な人が多いから、このような一般論を説くよりも、本書で紹介されている、類人猿の研究にジェンダー意識が色濃く反映していた例をあげた方がよいかもしれない。18世紀には、オランウータンの絵は女性的になまめかしく描かれ、類人猿にも月経やクリトリスや処女膜があるのかと、一流の学者が激論を闘わしたなど、今からみるとばかばかしい研究テーマを重要だと考えた社会的背景があったの

である。

「女性は科学にむいていない」のだろうか。この現在でもある根強い偏見にたいし、きちんと反論できるのは歴史を通じてだけだろう。よく知られている女性の科学者はごく少数であり、その事実をもって、女性には科学はむいていないという論拠が展開されてきた。科学史の中に埋もれた女性科学者の研究が、きちんと研究されるようになったのはごく最近の1990年前後からである。詳細は本書を読んでいただくことにして、ここでは女性に高等教育の門戸が開かれるようになってからは、女性研究者の自立度が高まったなどの研究があると伝えたい。

いろいろな学会で、女性研究者の入会が拒否されてきた歴史は興味深い。女性が入ると学会の権威が落ちるとか、女性には科学探求を遂行する知的能力は備わっていないという断定、また高度な知的活動は女性の妊娠・出産にさしつかえるのですべきではない、女性が学会に参加したりすれば白熱した議論が望めなくなる、などという議論がなされている。これは決して過去の笑い話ではすまされない。日本の学会でも、最近では大会時に保育室を設置するところが増えているが、設置してほしいという要求にたいして、子どもをつれてまで女性が参加しなくても、などという反対意見が現在でも聞かれなくはないからである。

さて、女性の科学研究者にとって、フェミニズムとは、自分自身が研究者として生き残るために必要な武器である。男性と同様に、きちんとした教育を受けたい、研究発表の機会も確保し、正当な評価を得たいといった、研究者として当り前の要求を実現するためには、専門の研究以外に、偏見と闘うための知識やノウハウも身につけなければならない。この本も、趣味や単なる知識を得るためのお勉強として読むのではなく、どのように自分の研究のパワーアップに使えるのか、という観点で注意深く読んでこそ、シリーズタイトル



「科学／技術のゆくえ」に答えることとなるだろう。評者の専門である天文学は、研究体制のもつジェンダー構造はさておき、研究内容や結果には、女性男性といった意識がとてもしりにくい。しかし、天文学で新しい概念や結果を提出するとき、それまでの常識とくい違っていけば、なかなか受け入れてもらえないこともある。研究者として、自分の研究環境をきりひろくことと、天文学上の新しい価値観を提示することは、共通した部分もあると思っている。

一方で、自分の研究テーマと女性研究者の環境をきりひろくことを同時に追求できる分野もある。この本の後半で紹介されているように、それらはジェンダー意識が研究内容に投影されやすい分野であり、人類学、進化論、霊長類学、考古学などがある。人類学協会や民族学協会での女性入会をめぐる論争は面白い。人類学では、研究体制から女性をしめ出すのに、専門知識が動員された。女性の頭蓋骨が小さいことを根拠に、女性の知的能力が劣っているという議論を展開するなど、男性優位、女性劣位を証明しようとする科学論争が学会でくりひろげられたのだ。

日本では残念ながらここまでの広がりは見られない。日本の女性科学技術者の歴史や現在の状況などについては、一章をさいて手際良くまとめられている。明治から終戦までの女性研究者の先達の紹介や、戦後、女子に教育の機会がひらかれ、どのように進学者が増えてきたかの統計数字、女性研究者の研究環境を改善しようとする動きなどコンパクトにまとめられ、理系には女性が少ないが、それは女性に苦手な分野があるからではなく、環境や指導者にめぐまれることが重要なファクターであること、女性の研究者を支援する環境をつくるのが今後の日本の科学／技術にとって大事であることなどが結論されている。

この章は、女性研究者の環境改善にとりくむ流れの中にいる評者にとって、少しばかり物足りない気がした。単に状況を報告するだけでなく、もっと励ましてくれたっていいじゃないとか、今後フェミニズムをどう展開していったらいいかについて、外国の教訓から何か示唆してくれたっていいのでは、と思ったのだ。生き残るための闘いを自分達だけでしなければならぬ状況の日本の研究者にとって、他分野からの励ましがあるとありがたい。日本は世界の中でもジェンダーバイアスの強い社会である。病理が極限的に出ているからこそ、フェミニズムの視点からの開拓が期待でき、

問題解決につながる研究分野があるはずである。

考えつくことをあげれば、たとえば心理学関係の学会には、キャンパス・セクシュアル・ハラスメントについて正面からとりこんでほしい。この問題は大学の権力構造が本質的な問題となっているが、それ以外にも、セクハラに走る男性教授のゆがんだ女性観や、自分より研究能力の優れた女性への隠れたコンプレックスなど、本人の資質的な問題も大きい。カウンセリング心理学や認知心理学などの教授が加害側の立場にいる例を見聞きするにつけ、心理学関係の学界が総力をあげて、このようなセクハラをする側の人間の分析や、それへの効果的な対処の仕方を学問的に開発してほしいと思う。ジェンダーフリー、バリアフリーの研究体制になってこそ、21世紀の科学研究が根本的に発展できるのだと思う。

さて、冒頭にあげたノーベル賞のメダルに話を戻そう。本書によると、西洋では自然を女性とみなして、その支配と征服に性的なイメージを付与してきた。自然の女神が半裸で立っていることがそれを象徴している。また自然を研究する行為は、観察をするといった受動的なものではなく、実験をし、積極的に攻撃的に自然にたちむかう男性的な行為とされてきた。このように科学にはジェンダー意識が色濃く反映されているので、学問の象徴である人物が男性であり、半裸の女性に対峙していることはきわめて自然に思われる。

今回この稿を書くにあたり、あらためてWebでメダルを確認した。物理学賞と化学賞のメダルの裏は、たしかに自然の女神のペールをめぐる図案であったが、科学の神である人物は女性になっていた。自然の女神の方は、胸をはだけた雰囲気の際はあったが、3次元バージョンを拡大してよく見ると、全体に薄いペールをまとっていた。昔の記憶が間違っていたのか、それともノーベル賞のメダルのデザインが変わったのか、確かめることはできなかったが、科学の発展というものについて、いろいろな示唆にとむ結果であった。

(かとう・まりこ 慶應義塾大学助教授)